

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教育実習をかえりみて：英語科〈一般〉
Author(s)	宮本, 邦彦
Citation	広大言語, 6 : 54 - 57
Issue Date	1966-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046247">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046247</a>
Right	
Relation	



「こりゃ、五郎さんはただごとじゃなか」っておもて、酒屋からわっかもんば連れてきてようよかよ、はかぐるう五郎さんば上原の五郎さんの家（え）まで連れていったもよたい。それから、五郎さんは五日も六日も熱んでて、酒屋の樽といだんじゃなかったぎゃな、あとで五郎さんの言うことによ、ありゃ河童のしわざやったちゅう話たい。

そいぎ、今夜はこいでおじじの話もおしみゃあたひ。またあすん晩に、はにゃあてやるせんによ。

民話になって残るくらいだから、河童はよほどの相撲好きだったらしい。水の近くでがわっばに會って「相撲とろい」と言われたら、必ず水から離れた畑の真中に連れて行ってやるよにという、伝説さえ残っている。これは、河童の急所は頭の上の皿で、これが乾いて水気がなくなると、全身の機能がにぶるといところからきている。また、それでも負けそうになったときは、最後の手段として、歯をむき出しにして噛みつくふりをしたら河童はおそれをなして逃げるよということである。これは前号に書いたよに、彼らは人間の歯をひどく怖れているからだ。

## 教育実習をかえりみて

### 英語科

宮 本 邦 彦

「広大言語」に「教育実習をかえりみて」と題するレポートが初めて登場したのは才三号においてであったかと思う。才五号では、どういわけか、これが収録されていなかった。しかし、我々の先輩の約七割が現在教職についておられるという事だけを考えても、この種のレポートは、とりあげられるだけの価値をもっているものと思う。又、実際に、才四号の教育実習録は、大いに役立ったと思ひ、今号にも投稿したのである。

☆ ☆ ☆

夏休みがまだ終らない九月七日に、中、高等学校教育実習のオリエンテーションが行われ、八日から二十日までが実習。そして又十月十二日からの一週間が小学校での教育実習であった。中、高校では教生三人に指導教官が一人割りあてられ、前半と後半で交代される。この二週間に九十単位時間を履習しなければならないのであるが、実習は一時間で六単位時間、批評会は一時間につき三単位時間として認定される。自分のグループの者が実習をしている時は、教室の後でこれを見学し、観察記録をとらなければいけない。見学は一時間につき一単位時間として認定される。

私が受け持った授業は、中学校では、一年生一回、二年生二回（内一回は試験の作製・監督及び採点）であり、高等学校では、一年生のリーダー一回、二年生のリーダーと文法を各一回ずつ、三年生の文法とリーダーを各一回ずつの計七回である。高三のリーダーは、オ一日でもあり、グループの中でもトップバッターとして登場したせいか、なかなか思うように進行せず、結局時間切れになってしまった。二回目以後は大体時間通りに終わることができた。リーダーの授業の進め方にはいろいろあるが、原則的には次のように行うのである。①点呼（但し二時限以後は必ずしも行わなくても良い）。これは、自分の気持をおちつけるためにも良い。②Review work 前時分の教材をもとにしてRecognition drillとProduction drillを行う。前者はいわゆる英問英答であり、後者は主に口頭作文である。10～15分でこれを終える。③Oral presentation of the new materials.つまり新教材の導入である。ふつうには先ずmodel reading, chorus reading, individual readingの順に行いnew wordsの説明及びparaphrasingを行う。特に新出語の説明には、いきなり意味を与えるのではなくて、defining sentencesにおいてそれをわからせる。特に低学年においてはこれに注意しなければいけない。たとえば、soloという語の説明は、Did you play the piano alone? Yes, I played it solo.のように行う。一通り内容の説明が終ると、④Consolidationとしてrecognition及びproductionを行う。これで五十分の授業が終る。実習の前に指導教官に教案を提出しなければならない。教案には、前記の①～④つまりTeaching procedureの他に、その時限の目標なども記入する。

こう言うとなんだか簡単そうに思われるかもしれないが、実際にはなかなかそうはいかない。思わぬところで全く予期しない質問が出てくることはしょっちゅうある。やっかいな質問には、簡単な説明だけを与えておいて後で個人的に説明しなければ時間が足らなくなってしまう。実習のあった日には放課後、批評会が行われる。教材研究は十分であったか。声の大きさ、板書の仕方、文字の大きさ、発問の仕方、生徒の質問に対する返答の仕方などは適当であったか。などについて厳しい批評がなされる。

見学をしている時には、生徒の様子など、よくみるととてもおもしろいことがある。実習生が、新しい単語を黒板に書くと、すぐに辞書を調べる者がよくいる。これは、意味を調べるためではなくて（意味はどうせあとでわかるのだから）、つづりのまちがいをさがしている場合が多い。又、「私はイギリスへ行ったことがある。(I have ever been to England.)」と、「私はイギリスへいたことがある。(I have ever been in England.)」と

いう二つの英文の訳を出して、前者は「行く」という動作に、そして後者には「滞在」という動作に重点がおかれています。という、さっそく生徒が立ち上って、「先生！滞在したことがあるのなら、どうしてもそこまで行かなければならなかったのだから同じことじゃないんですか」と質問する。もっとも、こういうのは、教生をこまらせようとして自分ではわかっていながら、出した質問であろう。でなければ、へりくつである。

「『はい 君！』と指名した生徒が実は、教生であった」という笑い話を聞いたことがあるが、これを私は自ら誘発(?)してしまった。別の班のI嬢の授業を見学するために教室に入ったところ、生徒の机が二つ三つ空席になっていたので、私は一番後の隅の机に座って一心に(?)メモをとっていた。その二つ隣の机では指導教官が同じようにメモをとっておられた。授業が半分位すんだ辺りで、「はいこの列の一番うしろの方！」ときた。どう考えてみても私の事らしい。知らぬふりをして答えてあげるのがせめてものつぐないか、とは思ったものの質問をよく聞いていなかった。そのうちに生徒もI教生も、それが教生であることに気付いて、どっと笑いだした。

そのあとでI嬢の言うには、「あのために、かえって教室の空気がやわらいだので、後半の授業がスムーズに進行したのだと、先生が言われた」とのことであった。中学校の方は、生徒が非常に活発で、質問をすれば大きな声で精一杯答えてくれる。特に私が受け持った一年生というのは、「実験クラス」ということで、テキストらしきものはほとんどない。一時間ほど指導教官の授業を見学して、そのやり方に従って新教材の導入を行う。これは、既習の文型、語句を基にして、Substitutionを主体として行うのである。私の時間では、過去形とその疑問文である。そのためのSubstitutionは、たとえば、You play baseball everyday. You played baseball yesterday. という二つの文型を何回か聞かせ、次にこの二つを、コーラスで行わせ、大体わかったころにこの二つの文型を一通り板書して見せる。新しい語が含まれていなければ“————.”と“————yesterday.”とだけ書くこともある。次に、everybodyのところをyesterdayやlast week等に代えて、生徒に言わせる。その逆も又行う。疑問文にする場合には、先ず自分でHe played the piano yesterday. を数回くりかえしておいて、“Question!”と言って生徒にアてると、サッと立ち上って、“Did he play the piano yesterday?”と答える。次の生徒には“Statement!”と言えは、“He played the piano yesterday.”と答える。「Substitutionはできるだけspeedyに、生徒に考える時間を与えないように。」と言われる指導教官の行われるSubstitutionは実に早い。二列(12~14人)を終えるのに三十秒足らずである。一人が答え終るまでに三人~四人目が答えはじめている。

ところで、小学校の方であるが、私は三年生の教室に配属された。一クラスに教生が六名である。終りの二日間は理学部の教生も加わったので、十名になった。担当教科は、自分の好きなものを選択できる。音楽でも、体育でも造形でも良い。私は理科を二時間ほど受け持った。休み時間になると、生徒がどっとおしかけてきて「先生、先生！」と大声をあげながらやってきて、両手にぶら下ったり、肩にとび乗ったりするのは、いささかとまどった。授業中でも高校生とは全く対照的で非常に活発である。「教生」でも生徒達にとっては立派な先生なのである。こちらの話すことを一つ一つ一生けん命に聞いている。誤字など書こうものなら、みんな一せいに注意してくれるし、書き順でもちゃんとみている。それだけに低学年を持つ教師の責任は重い。一言一動がすべて生徒に反映されると言っても決して過言ではない。生徒と共に登校して朝礼に参加し、生徒と共に遊び、食べ、作業をし、そして学ぶ。これが小学校での一週間であった。実際のところ、中、高校の免状修得のために、なぜ小学校まで実習しなければならぬのかと、多少の疑問をもっていたのであったが、それは完全に解決された。中学生、高校生だってやはり小学校からやってくるのである。学校教育の出発点である小学校での生徒が、どんなものを客観的に観察して知っておくことは不可欠なことであろう。

以上が今年度の教育実習記録である。思ったこと、感じたことをうまく表現する事は実に難しい。どうか、不足な点、不備な点は補いながら読んで下さい。

## 教育実習をかえりみて

### 国語科

折出朋子

教育実習はつらいものであるという言い伝えに、だいぶ前から、話し方教室、面接のなんとかという広告や本の背が目についていた。いざ始まってみると、話し方どころではない。

はじめての時間、高校三年一組の古文、源氏物語である。源氏物語の細かい筋は、記憶にない。それにもかかわらず、夕顔の巻「はかなき契り」は、『外科手術後、切り口を縫いあわない』『着物ばかりで中に人間のはいていない』という形容がつく授業で、無事済んだ。しかし、黒板の方を向くことができなかった。

一年B組(中学)の「趣味を持ちたい」は『道徳』の時間で無事に、にこやかに笑って進んだ。九月十日、指導教官の広瀬先生の授業を参観した。「生まれいずる悩み」で「きみに対するわたしの驚きはどう変わったか？」を問題に、50分が時間の意識をする間もなく過ぎた。案外平